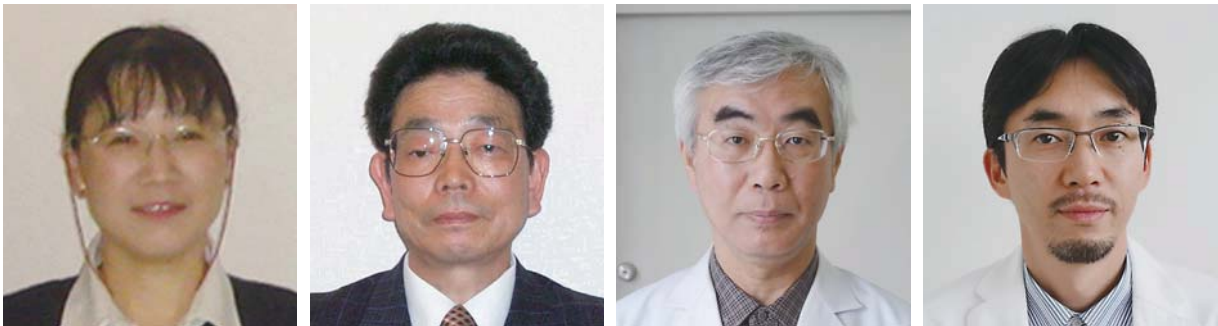


めでいかすとり Médicastre



「巳年の年男・年女」

鶴岡地区医師会

25年 1月号

年頭のごあいさつ



「病気を診ずして人を診よ」

社団法人 鶴岡地区医師会
会長 三原 一郎

新年あけましておめでとうございます。会員の皆様におかれましては、決意を新たに良き新年をお迎えのことと謹んでお慶び申し上げます。昨年 4 月に鶴岡地区医師会会長に就任し、早、8 か月が経とうとしております。医師会長としての重責を感じた半年余でしたが、役員、会員また職員の皆様の温かいご支援とご指導のおかげで、大過なく職務を遂行できたのではないかと考えております。この場をかりて、御礼申し上げます。

さて、昨年末には、政権交代という大きな出来事がありました。国民は、民主党が掲げた選挙公約が絵に描いた餅だとみすかし、民主党政権に落第点をつけた結果だったのでしょうか。政権は自民党に移りましたが、喫緊の課題は山積しており、医療を含む社会保障が後退しないよう、今後の政権運営に注目したいと思います。

・昨年度の事業を振り返って

医師会の各種事業の運営は、課題を抱えてはいるものの、概ね順調に運用されていると評価しています。これも一重に、皆様のご尽力、ご協力によるものと感謝申し上げます。医師会本来の役割としての地域医療への貢献に関しては、ここ数年取り組んできた緩和ケア普及のためのプロジェクト（庄内プロジェクト）、地域連携パス、医療情報の IT 化、在宅医療連携拠点事業なども順調に推移しています。

庄内プロジェクトは、国の委託事業終了後に南庄内緩和ケア推進協議会を設立し、今年で 3

年目を迎えますが、研修会、症例検討会、講演会などを継続し、在宅緩和ケアのさらなる普及を目指し、活動しています。脳卒中地域連携パスに関しては、昨年度は維持期を含めたパスデータの解析を行い、集計表第 1 号を発刊することができました。また、医療マネジメント学会やクリニカルパス学会などにその成果を多数報告させていただきました。新 Net4U の開発は、ここ数年喫緊の課題でしたが、昨年 5 月、医療と介護を繋ぐヘルスケア・ソーシャル・ネットワークとして全面改訂し、現在、順調に運用されています。さらに、新 Net4U はちょうかいネットにも参加することで、病院から在宅まで、医療から介護までシームレスな情報共有可能なシステムとなりました。在宅医療連携拠点事業室「ほたる」は、2 年目の事業も受託することができ、全国の手本となる医師会モデルの先進地区として在宅医療を支援するさまざまな活動を行っています。

・医療をとりまく現状

本年度は、保健医療計画を見直す年に当たります。医療計画の重点課題として、従来、4 疾病（がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病）、5 事業（救急医療、災害時における医療、へき地の医療、周産期医療、小児医療）が記載されていましたが、来年度からはこれに精神科疾患が追加され、5 疾病 5 事業となります。さらに、在宅医療体制の充実・強化も計画に盛り込まれます。

・精神疾患

精神疾患は、08 年の調査で患者数が 323 万人

とがんの152万人の2倍に達し、現行4疾病でも最も多い糖尿病の237万人をも上回っています。とくに、近年は、職場におけるうつ病、高齢化による認知症の増加など、国民に広く関わる疾患となっています。また、精神疾患による死亡は年間1.1万で、さらに、年間3万に上る自殺者の9割が、何らかの精神疾患を患っていた可能性もあり、緊急性も高いといわれています。医療提供の観点では、地域の精神科をはじめとする病院、診療所、訪問看護ステーションなどが、個々の機能に応じた連携を推進することが求められています。

・在宅医療

超高齢社会の進行とともに、年間死亡者数は2025年には、現在の1.5倍に当たる約160万人となり大量死時代を迎えます。また、医療介護の対象患者は、これからの10年間で、現在の450万から750万人へと急増します。一方で、国民の70%は、最期の療養場所として自宅を希望しているにもかかわらず、在宅での看取りは、12%程度に過ぎず、一方病院で亡くなる人が87%という現状があります。医療先進国であるアメリカや福祉先進国のオランダでは、病院、施設、自宅でのそれぞれの看取り数は、ほぼ同じ30-40%であり、日本の終末期医療は偏っていると云わざるを得ません。

このような背景の中、在宅医療の充実とは、在宅看取りを進めることだとも言えます。在宅看取りを進めていくためには、医療、介護のみならず、患者・家族を含めた多面的なアプローチが必要ですが、医師会としても積極的に取り組まなければならない重要課題と認識しています。

・地域包括ケアシステム

高齢化社会においては、地域包括ケアシステムが求められています。地域包括ケアシステムとは、ニーズに応じた住宅が提供されることを

基本として、生活上の安全、安心、健康を確保するため、医療、介護、予防のみならず福祉サービスを含めたさまざまな生活支援サービスが日常の場で適切に提供できるような仕組みのことです。換言すれば、予防（介護予防）、医療（在宅医療、訪問看護）、介護（生活支援、身体介護、基礎的医療ケア）、生活支援（見守り、配食、買い物、虐待防止、成年後見）、住まい（福祉は住宅に始まり、住宅に終わると言われている）が包括的、一体的に提供される地域のあり方のことです。地域包括ケアシステムは、高齢者が尊厳をもって、その人らしく安心して生きていくことを支えるまちづくりと言ってもいいと思います。行政が主体に進めることになるとは思いますが、医師会としても積極的に関わっていききたいと考えています。

・おわりに

社会が高齢化し、脳卒中、がん、糖尿病など、治らない、治せない病気が多くを占める今の時代において、医療の目的は病気を治すことから、その人らしい生き方、死に方を支えること、生きがいを支援することへと軸足を移していく必要があると考えています。してあげる医療から求めに応じた医療へ、お仕着せの医療から患者とともにある医療へ、延命のための診断・治療から患者の生き方・死に方を支援する生活モデル重視の病院・地域づくりへ、われわれはシフトしていかなければならない、そんな時代なのだと感じています。「病気を診ずして人を診よ」は、私の出身大学の理念ですが、先達は医療の本質を見抜いていたと、今頃になって実感しているところです。

今年一年の皆様のご健勝とご多幸を心より祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

年頭のごあいさつ



「新年を迎えて」

湯田川温泉リハビリテーション病院
院長 竹田 浩洋

新年おめでとうございます。会員の諸先生におかれましては、ご健勝にて新春をお迎えのこととお喜び申し上げます。今年がより良い一年となりますよう、先生方並びにご家族の皆さまのご多幸をお祈りいたします。

去年は、ロンドンオリンピックでの選手の活躍や、山中伸弥教授のノーベル賞受賞、当地区では鈴木伸男先生の旭日双光章受章など、明るいニュースが多く、「金」の字がふさわしい年とされました。しかし一方、大震災以来の沈滞ムードが日本全体を覆い、復興・再生が叫ばれながら一向に進路は開けず、飽き飽きするような政争に明け暮れた一年でした。それでも、慌ただしい師走選挙の中で生まれた安倍晋三政権が安定多数を獲得し、「決められない政治」を克服できる見通しが立ちました。難問山積のなか、単に政権が移動したに過ぎない「よりまし」内閣に終わらないよう、膠着した局面が打開されていくことに期待したいと思えます。

さて当院では昨年春の職員新採により、予定されたりハビリスタッフ増員もほぼ充足され、新人教育完了の秋頃には、365日リハビリ体制もすっかり定着いたしました。しかし、通所リハビリやMRI共同利用が好調なのに対して、入院患者数はかつてないほどの激減状態に陥りました。これはここ数年の傾向である春・夏の入院減に加えて、年度初めの施設新設ラッシュにより、転入所が増えたことが原因です。諸先生からの患者紹介や、院内の努力にかかわら

ず、病床利用率は7月にはついに70%台にまで低下するに至りました。

病院収入の柱となる入院収入の大幅減が懸念されましたが、去年の診療報酬改定の際新設された回復期リハビリ病棟入院料1取得に努力し、9月以降これを算定することができました。今後とも、重症患者の早期受け入れ、重症患者の機能回復や在宅復帰率など、高い数値目標をクリアし続けなくてはなりません。努力を続けたいと考えています。リハビリスタッフが増員されたことによるリハビリ収入増とあいまって、患者1人当たりの診療単価が上昇し、病床利用率の低下による減収をカバーすることができました。このまま行けば、今年度の入院収入は、予算編成時の目標達成は困難なもの、昨年以上の実績を残せることが確実と見込まれます。

去年は新バージョンのNet4Uに加えID-Linkも導入され、急性期病院入院中の画像や薬剤使用歴など、より詳しい患者情報を転院前に取得できるようになりました。これにより、荘内病院との連携が一層深まったといえます。また、12月より酒田地区とも脳卒中パスがつながることとなり、これを機会に日本海総合病院ともID-Linkを通じた同様の連携が可能となると思われます。両病院からの転院がより円滑に、そして便利になった一方では、患者獲得競争も激化することが予想されます。リハビリ内容の一層の充実と、回復期リハビリ病棟の質的向上

を目指していきたいと考えています。

10 月には、脳卒中地域連携パスを利用した歯科との連携も始まりました。口腔ケアは肺炎などの合併症防止や、急性期治療後の栄養改善・体力回復などに大きな意味を持っております。急性期病院から転院してきた脳卒中患者を、鶴岡地区歯科医師会で作成されたチェックリストに従い当院で検査し、必要な患者に早期に歯科介入をしていただくことを目的としたものです。当院退院後も継続される場合はその旨を連

絡いたしますので、かかりつけ医の先生方も、歯科主治医との連携をよろしくお願いいたします。また、昨年もお願いたしましたように、退院後の ADL 低下（Barthel 指数 10 点以上の低下）に対しては、再入院・再リハビリ制度を実施しております。該当する患者さんをお持ちの先生がおられましたら、どうぞご紹介をお待ちしています。

今年もどうぞ宜しくお願いいたします。



表紙写真にご協力いただいた先生の紹介（敬称略）

高橋
美香子

真家
興隆

斎藤
純夫

佐藤
慎二

三科
武

腰越
直也

黒澤
久子

堀内
隆三

今立
明宏



ご協力ありがとうございました。



新年の抱負（年男・年女）

高橋 美香子

多職種が力を出し合っただけの栄養療法の追求、そして、看取りの場を広げる取り組みなどに力を入れたいと思います。患者家族の決定を支え、障がいを持った方々の尊厳といのちを守る姿勢を貫きます。

今立 明宏

昨年より鶴岡地区医師会の役員をやらせて頂くようになり、9ヶ月過ぎました。新年も本業の小児科診療と医師会の仕事に精進したいと思います。関係各位の皆様、本年もよろしくお願い申し上げます。

斎藤 純夫

最近、疲れ気味。体調を整えて、もうひと頑張りかなと考えています。

三科 武

へび年男で還暦を迎えることになりました。へびは世界的に医療の象徴で、WHOや救急車のマークとして使われています。このマークに恥じないようにがんばりたいと思います。でも花のニッパチと言われた頃が懐かしい。

真家 興隆

へび年生まれ、72才

生まれは昭和16年、へび年です。この年、日本は真珠湾を攻撃し戦争を始めました。戦後はひどい食糧難で、子供の頃の思い出は“腹へった”です。山野をめぐって捕まえたへびやかえるは貴重な蛋白源でした。あの頃のへびに感謝し、次の巳年まで元気に働きたいものです。

堀内 隆三

これからの日々を林住期（インド哲学）と思い定め、断捨離で身と心を削ぎ落とし、軽やかに60代を迎えたい。そして、しなやかに異文化や未知の人との出会いを楽しみたいと思います。

腰越 直也

今年はまだ還暦を迎えます。かなりくたびれていますが、もうしばらくは頑張らねばならないようです。

黒澤 久子

あけましておめでとうございます。

癸巳年生まれで人生の節目の年になりました。

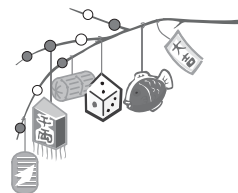
これまで出会えた多勢の皆様へ感謝の気持ちを伝えたいと思います。

そして、これからも毎日を大切に生きていきたいです。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

佐藤 慎二

前回の巳年からの12年間、勤務医として働いているうちに、無趣味なつまらない男になってしまいました。この12年間は趣味にもいそしみ、少しはおもしろい男になって12年後の年男を迎えるのが目標です。





鈴木伸男先生 旭日双光章受章 まことにおめでとうございます

旭日双光章を受章して

平成24年秋の叙勲で、保健衛生功劳ということで旭日双光章を拝受いたし、身に余る光栄に存じております。

去る11月15日に家内と一緒に宮中に行って天皇陛下の拝謁を賜って参りました。

さて私は昭和43年に新潟大学の外科教室から荘内病院の外科に赴任し、以来、荘内病院に30年間勤務し、その後、当地区医師会の荘内地区健康管理センターに14年間勤務して現在に至りましたが、その間、多くの先輩・同僚・後輩から教えられ、引っ張られ、支えられながら仕事をしてきました。

荘内病院では、前半の20年間は外科医として日々手術に追われ、後半の10年間は管理職として病院新築の準備などにも携わらせていただきました。

医師会に参りましてからは、健康診断業務に従事する一方で、議長や理事を務めさせていただきましたが、その中で当地区医師会のハード・ソフト両面での著しい発展の経緯を見させていただきました。これはひとえに役員の方々の前向きな姿勢や卓越した企画力あるいはエネルギッシュな実行力によるものであり、私自身、大きく薫陶を賜り、鼓舞されました。

県医師会の会議に出席したときなどに、他地区の先生方から「鶴岡は昔から行政・医師会・病院の仲がよく、まとまっている」と言われたことが何回もあり、嬉しい限りでした。

ところで、去る9月下旬に叙勲の内示の知らせを聞いたときは正に“寝耳に水”で「何でこの私が？」と思ったことでしたが、事実だとすれば、これまで一緒に仕事をさせていただいた皆様全員、ひいては鶴岡地区医師会あるいは荘内病院が対象であると思った次第です。今、改めて鶴岡で半生を過ごすことができたことに大きな喜びを感じますとともに、この場をお借りして、関係各位に深く感謝の意を表させていただきます。

ありがとうございました。



鈴木伸男先生 旭日双光章受章祝賀会

期 日：平成24年12月13日(休) 19時～

場 所：グランド エル・サン クリスタルホール

鈴木伸男先生は、平成24年秋の叙勲において、種々主要な役職を通し、長年にわたり地域の保健医療活動にご尽力された功績が認められ、「旭日双光章」を受章されました。

その祝賀会では、当会会員のほか、鈴木先生と公私ともに親交の深い総勢176名の方々からご出席をいただき、この度の受章を祝福いたしました。



故 遠藤 勝彦 先生のご冥福をお祈り申し上げます。

平成 24 年 12 月 10 日ご逝去 満 86 歳

弔 辞

謹んで鶴岡地区医師会会員 故遠藤勝彦先生のご霊前に弔辞を捧げ、医師会を代表し、深く哀悼の意を表します。

先生は、さる12月10日の午前0時15分、しんしんと降り積む雪の中、いよいよ冬の到来かと思わせるそのときに、忽然と永眠されました。

先生は、昨年あたりから体調を崩され、ご静養中ということでしたので、私どもはその後のご容態を案じながらも、回復されることを期待しておりましたが、享年87歳にしてお別れしなければならなくなったことは誠に残念でなりません。

私どもは優れた先達を失いました。当医療界並びに地域にとりましても悲しみは大きく、またご家族・ご親戚の方々におかれましても、お悲しみはいかばかりかと推察いたします。医師会会員並びに職員一同心からご冥福をお祈り申し上げます。

先生の足跡を顧みますと、先生は東京都のご出身であり、昭和26年に慶應義塾大学附属医学・専門部をご卒業された後、福島県郡山市の太田総合病院に勤務され、さらに昭和27年から38年までの12年間に、仙台市のアメリカ陸軍病院を始め、会津若松市、上山市、アメリカ・イリノイ州、あるいは茨城県、群馬県などの数々の民間病院や診療所において、外科医・内科医・小児科医・整形外科医としてご活躍されました。

そして、昭和37年から医師不在となっていた土田医院の招請に応じ、39年に同院の院長に就任されました。その後、昭和45年には自ら遠藤

医院を開設、今日にいたるまで長く地域医療に貢献してこられました。御開業当時の鶴岡市の周辺は、村単位の行政区割りで管内の連携関係も未成熟でしたし、現在のような医療制度が確立されていたわけでもありませんので、医業の遂行には多くの困難と制度上のしがらみもあったと思いますが、先生は、筋の通らぬことには頑強に抵抗し、一筋に地域住民の健康を守るという生き方を、不屈の精神と高い志をもって貫いてこられました。

また先生は、平成15年には県学校保健連合会より学校保健功労賞を、18年には、県医師会からも学校保健功労賞を受賞されました。このように、とりわけ児童・生徒の健康を守ることに力を注いでこられましたので、地域住民の信望も厚く、期待も大なるものがありました。まさに、先生は当地域における巨星のお一人でありました。

いま、医療界は難しい時代の断崖に立たされておりますが、私どもは先生のご遺訓に沿い、ご指導を深く銘記し、地域医療の発展に尽くしてこられた先生のお気持ちにおこたえしたいと思います。

先生には、幸いにして将来を期待される立派な後継者がいらっしゃいます。どうか、心おきなく安らかにお眠りください。

最後に、先生の永遠の旅路の平穩を祈ってお別れの言葉といたします。

平成24年12月13日

鶴岡地区医師会
会長 三原 一郎



編集後記

新年あけましておめでとうございます。会員の皆様は新しい年をどのように迎えたでしょうか？

昨年 4 月から三原新会長のもとで鶴岡地区医師会の活動に取り組んできましたが、各種事業は概ね順調に運営されているようです。会長の年頭挨拶にもありましたが、保健医療計画で来年度からは精神科疾患が追加され、5 疾病（がん、脳卒中、心筋梗塞、糖尿病、精神科疾患）、5 事業（救急医療、災害時における医療、へき地の医療、周産期医療、小児医療）となり、在宅医療体制の充実、強化が盛り込まれるとのこと。医師会、病院、診療所、行政などの緊密な連携が必要と思われ、さらには将来の庄内地区二次医療圏全体の医療体制のビジョンを作っていかなければならないと思っております。

救急医療については休日夜間診療所の診療で会員の皆様のご協力を頂いており、ありがとうございます。めでいかすとるの統計に各月の受診状況が掲載されていますが、皆様見ているでしょうか？今年度の年末年始（12/29-1/3）の休日夜間診療所と庄内病院救急センター受診者数は下記のようなものでした。

休日夜間診療所 806名（前年比 +277名）

庄内病院救急センター 560名（前年比 -30名）

（うち入院数 93名）

平成19年、20年までは庄内病院の年末年始の受診者数は800名を超えていました。休日夜間診療所の開設に伴い、庄内病院の救急センター受診患者数は減少していますが、入院となる患者さんは減っていないようです。年末年始に休日夜間診療所で診療して頂いた先生方には感謝申し上げます。

今年一年が皆様にとってより良い年でありますように…。

（石原 良）

編集委員：伊藤 茂彦・福原 晶子・石原 良・中村 秀幸・斎藤 高志・今立 明宏

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町 1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail ishikai@tsuruoka-med.jp

URL <http://www.tsuruoka-med.jp>